

ふたたび大槌の町を訪れて

夜行バスで釜石に入ったところから空は明るく朝日が昇り始めた。バスの窓から眺めていると昨年より活気があるように思えた。車や、人々の行き交う様は「前向きになったのかな、歩き始めたのかな」と一人で勝手な事を思いめぐらしていたがきっと、悲しみ、辛さ、寂しさを乗り越えて、でも、生きてゆく事として歩き始められたのだろうと思った。

毎日マスコミで報道されることを目にしていたので人々のこころの深い部分を思い、いのちの重さを感じた。



ベースキャンプに入って午後から市内の視察に出かけた。あちこちで重機が動いているので、昨年よりここでも前向きかなと思いつつ巡り歩いた。市庁舎では壊れた玄関の前で祭壇が設けられていて花が捧げてあり、悲しみの深さを感じ、多くのいのちが一瞬で飲み込まれたと思うとその方たちの悔しさとか、家族を思いやるこころの切なさなど、どのような思

いで波に抗い、抵抗出来ず身を任せて逝かれたか考えながら見渡せば多くの家の土台が悲しみを表しているように見えた。

今回のボランティアは前回と違って、私服で活動をした。ご家族や親戚でいのちを失った方々にはお会いしていないが、すべてを波に持って行かれて仮設に入居しておられる方々に足湯のサービスでお会いした。一緒に行った子供たちの優しいサービスにこころを満たされた様子で感謝しておられた。

お茶を飲みながら、87歳のおばあさんは同じことを何度も話してくださりでも、明るい表情で御自分の今を受け入れて居られる様子だった。子供たちの「有難うございました」の声に送られて仮設に帰って行かれた。

最後の日は山田町でさくらの植樹の前準備に参加した。ここでは、800人ちかくの方々が亡くなられたので、800本の桜を植えるとのことで、直径50センチ深さ50センチの穴を掘る作業だった。慣れない作業でスコップを持って土を掘っても、掘っても、深くならず木の根に邪魔され難儀した。

それでも、1時間で5・6個の穴を3人で掘りあげて満足しながら夕食の準備にベースに帰った。

ゆうべの分かち合いはみんな「疲れたけれど良かった。また、来たい。」との声もあり同行の子供たちの頑張りに心から拍手した。

分かち合いの後、昨年までベース長をされていた古木神父様にお会いして1年前を懐かしく思い出した。「今日桜の穴掘りをしたけれど、20年たつての花は見られませんね」と言えば、「いやいや生きていますよ。もし来れない時は写真を見ればよいよ」何とも優しいいつもの語り口だった。

夕食後、大槌ベースのみなさんに送られて夜行バスで大槌を後にした。

昨年はあまり分からなかったが、今回、ベースのスタッフの方々の御苦勞が良く分かった。毎日大変だろうと思う。東京に帰り毎朝「今日はどのようにボランティアを受け入れて居られるかしら？」と御苦勞を考えるこの頃である。

良い経験をさせていただいて感謝している。

聖心のウルスラ宣教女修道会

シスター 植木 脛子

